

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

資格取得を経て ～自分と向き合う～

OB MESSAGE

通信教育部社会福祉学科卒業生 **渡邊 沙良**

資格取得を目指すきっかけ

私は通信教育部の福祉心理学科を卒業し、障がい者福祉施設に就職が決まりました。そこで日常業務を行っていく中で、障がいや制度の知識の乏しさを実感し、支援者としてどのように関わっていくべきなのか、今後、自分はどう仕事をしていくべきなのかに悩み始めたころ、上司よりある言葉をいただきました。

「精神保健福祉士の資格を取ってみたいか？」

詳しく話を聞くと、業務の中には通院や役所への同行もありうることで、その場合には、資格の有無で先方の対応が大きく変わってくるということでした。資格がなくとも、関わりに対する個人の考えを重視してくれる職場ではありましたが、通所者の方々に最善の支援を行うには資格が強みになるのだと、資格取得に向けて本気で考えるきっかけとなりました。

毎日の仕事と勉強の両立は、簡単なものではありませんでした。しかし、知識が増えていく楽しさ、1発で試験やレポートをクリアできた時の達成感が、周囲に同じ学生のない孤独な通信教育を最後までやり遂げられたモチベーションだったのではないかと思います。

実習先で得たもの

私は、精神科病棟というものを知りません。2か所の実習先は、①就労継続支援A型事業所、②復職デイケアだったからです。精神障がい者がとても苦しい時期であろう入院生活を知らないのは、今後の自分にとってマ

イナスになるのでは、と実習前に悩んだ時期もありました。しかし、より社会と近い距離にある施設での実習で、精神保健福祉士は“障がい者とあらゆる社会資源を繋ぐ”ことが職務なのだと思感することができ、病棟がすべてではない、最終的に生活する場は地域社会の中なのだから、と気持ちを新たに実習に取り組めるようになりました。

利用者の方との会話の中で、聞いていいのか、どこまで踏み込んでいいのかわからなかったと記録に書いた時、「なぜ、その質問をできなかったのか。答えたくない質問には相手はしっかりと意図を伝えたいと意思表示してくれたはずなのに」と、実習担当者に言われました。振り返りの中で、自分の弱さや甘えと向き合うことができました。なぜ質問をできなかったのか。たどり着いた答えは“嫌われたくないから”というものでした。資格を取得し、精神保健福祉士として今後仕事をしていきたいのなら、「嫌われることを恐れてはいけません。個人の状況、背景をしっかりと捉えることが我々の職務であって、友人と会話するわけではない。嫌われることを恐れては仕事として成り立たない」実習の中でとても印象に残った言葉でした。後の職場でも同じ言葉を上司に言われました。今は、嫌われたとしても、対象者のその後の生活がより良くなり、そのため何かをできるであろう情報や状況、今後に向けて検討できる事柄を知りえるのなら、職務として正解なのだと思いますようになりました。と言っても、対象者の気分を害していいわけではないこと、状況の判断をしながら確実に関係を築いていく必要があること、対象者の言葉だけではなく、表情やしぐさ、起こりえないかもしれないことも万が一を考えて先を見通していかなければならないことなど、多くを学ぶことができました。

資格取得～現在

現在、私は前職を離れ新しい職場に勤務し、東日本大震災の影響で北海

道に避難している方々の支援をさせていただいています。震災から今年で5年目に入りますが、生活をする中でどこか風化されていってしまっている災害だと思います。現在も北海道では数多くの団体が活動しています。その業務に携わらせていただくことは、自分の知らない悲惨な現状を知ることができる、今も不安や悩みを抱えながらも日々の生活を過ごしている当事者の生の声が聴ける大切な時間だと思います。災害について勉強することもあります。

精神保健福祉士という資格は、医療機関や福祉施設だけが職場ではありませんでした。現代はストレス社会と言われ、いつ、どこで、誰が、どのような状況に陥るのかわからない時代です。今、私は新たな職場で考え悩みながら働いています。職場はいろいろなところにあると思います。自分はどうしたいのか、何をしたいのか、将来どのような場所で働きたいのか、先を見据えながら、資格取得後を想像して勉強をしていくと、より自分の身になる勉強ができると思います。通信での勉強は孤独との戦いもありますが、自分のペースを守れる学びでもあると思います。決して無理せず、自分のペースでレポート、試験、スクーリングを進めていただきたいと思います。